



【体験版】

文字サイズ・中

ハートの色↓♥

本作品の無断転載・無断使用を
禁じます。

AI学習への利用も固くお断り
します。

もくじ

第一章（初めての股間叩き、初体験）

第二章（洗濯バサミ、おもらし）

体験版は文字サイズ中・ハートの色は黒で固定です。
有料版には他の文字サイズ&白いハートのバージョンも同梱しております。

第一章

ラブシーンまでジャンプ

——股間を叩いてほしい。

女の子の大事な部分を、無骨で大きな男の手で蹂躪してほしい。
羞恥心をかき立てるような言葉で追い詰めてほしい。

それが言えないせいで、私の夫婦生活は難航していた。



エスパルサ侯爵家は、この国の者なら誰もが知っている名門貴族だ。

強い魔力を持つ一族で、代々の当主は魔法科学の発展に貢献し

てきた……と、私も物心つく前から聞かされていた。

蛇口をひねるだけでお湯が出るシャワーも、火を使わずにランタンが光るのも、ひとえに魔法科学のおかげ。

今は遠くに離れた人と会話できる技術を研究しているらしい。手紙でのやりとりは時間がかかるし、実現すれば私たちの生活はもっと便利になると思う。

ちなみに、魔法を使うのに必要な魔力は国民全員が持っているわけではない。魔力を持つ人間は貴重なので、十五歳になると魔法学校に入学することが法律で決められている。

私はしがない男爵家の生まれだ。魔力持ちが生まれやすい家系らしく、二つ年上のお兄様と私は魔力を持っている。

私の魔力の強さは平凡だけど、お兄様の魔力の強さは抜きん出

ていた。

そのおかげで、貴族用の魔法学校に入学したお兄様はすぐに有名になったらしい。

しかも、妹の自分から見てもなかなか顔立ちが整っている。性格もいいし、自慢の兄だ。

お兄様からは楽しい学校生活の話を聞いていたので、私も十五歳になった時にわくわくしながら入学した。

——でも、期待していたような学校生活にはならなかった。

入学前から私は「あいつの妹が入学してくるらしい」と噂になっていたみたいだし、入学後も「あなた、あの人の妹なのね」と頻繁に声をかけられた。

私の魔力が普通だと知るなり、みんな残念そうな顔をして去っ

ていく。兄が優秀だからこそ、妹もそうに違いない……そう思っていたみたい。

私はただの一度も「自分は優秀なんです！」なんて言ったことはないのに。勝手に期待されて、勝手に落胆されるのは正直傷つく。

文句を言っても仕方ないし、優秀すぎる兄を持つ定めだと仕方なく受け入れた。

そんな中、私の凡庸ぼんようさを知ってもなお優しくしてくれた人がいた。

それがエスパルサ侯爵家の令息、セシリオ様だ。魔法学校でも歴代一と言われるほど強い魔力の持ち主である。

お兄様はセシリオ様には及ばないけれど、それでも強い魔力を

持っていた。魔法科学について論議しているうちに意気投合したらしく、二人は親友だ。

二人が並んでいると絵になる。セシリオ様もかなり美しい外見をしているのだ。

ぱつと見は黒だけど、日光の下ではうつすら濃紺に見える神秘的な髪。左右非対称な髪型アシンメトリイも魅力的だ。ワインレッドの瞳も宝石みたいで本当に綺麗。

セシリオ様を一目見た時、「こんなに美しい男の人がいるなんて」とドキドキして、まともに話せなかったのを今でも覚えていて。お兄様よりも顔立ちの整った異性に出会ったのはその時が初めてだった。

見た目だけでなく、声も低く落ち着いていて、なんというかぞ

くぞくする。

セシリオ様は私に「親友の妹」として優しく接してくれた。勉強も教えてくれた。名門侯爵家の跡取りなのに、家柄を鼻に掛けることなく気さくに接してくれる。

私は気がつけばセシリオ様に惹かれていた。

恋愛というよりは憧れだったと思う。魔法学校の中ではセシリオ様のファンクラブもあったし、生徒にとって彼は羨望の的だった。

そんな人気者と付き合いたいとか、ましてや結婚したいなんて考えたこともない。未来を想像することさえ恐れ多い。

セシリオ様は家柄が釣り合うご令嬢と結婚して、私も私でそれなりに恋愛をして平凡な家庭を築くのだろうと思っていた。

魔法学校の卒業後にお兄様は魔法事業を立ち上げて、セシリオ様は宮廷魔導士になった。

進路は違えど卒業後も二人は交流があり、セシリオ様は家に遊びにきては私の勉強を見てくれた。

おかげで私は平凡な成績にもかかわらず、そこそこの魔法企業に就職できた。

魔力がある者は、貴族令嬢でも就職して国に貢献するのが一般的。卒業後、すぐに結婚して家庭に入る令嬢なんて、ほんの一部の高位貴族くらいだ。男爵令嬢の私とは無縁の話である。

だから私は働きつつ、充実した日々を過ごしていた。

——そして私が二十四歳になったある日のこと、お父様が莫大な借金を抱えてしまった。「騙された」と言っているけれど、詳し

い事情は知らない。

とても返せるような額じゃなかった。返済が滞り裁判を起こされれば、財政破綻による爵位返上および家門取り潰しの沙汰がくだるだろう。

そして平民落ちし、借金まみれの生活になる。私も昼は普通に働きながら、夜は身売りをして稼ぐしかない。顔のいいお兄様も夜は男娼になるだろう。

そんな我が家に救済の手を差し伸べてくれたのがセシリオ様だった。

「借金は俺が肩代わりする。エスパルサ侯爵家にとっては大した額ではない」

使用人をすべて解雇し、金目の物も売り払ってがらんとした我

が家に訪ねてくるなり、セシリオ様はそう仰った。

それを聞いて身を乗り出すお父様を諫めながら、お兄様が言う。

「いくら親友とはいえ、そこまで甘えるわけにはいかない」

もし借金を肩代わりしてもらうことになれば、対等な関係は崩れ、親友ではいられないと考えたのだろう。

お兄様の矜持は分かるし、お金持ちだからとはいえ他人のセシリオ様にお金を融通してもらうのはおかしいと私も思う。

しかし、セシリオ様はお兄様の返事を聞くなり一笑に付した。

「そう先走るな。善意で金を出すわけじゃない。取引をしたい」

「取引？ 見てのとおり、うちはエスパルサ侯爵家と取引できるような状況じゃないが？」

応接室に通しているものの、テーブルの上にはお茶すらない。

来客をもてなす余裕すらないのだ。

「彼女を俺の妻として迎えたい。支度金という形で借金はずべて払おう」

セシリオ様が私の顔を見て仰った。

私も、当然両親もお兄様も驚いて絶句する。

（セシリオ様が私と結婚……？）

意味が分からない。私には強い魔力もなければ、名門貴族でもなく、エスパルサ侯爵家に求められるような人材ではなかった。混乱して頭に疑問符を浮かべていると、お兄様が沈黙を打ち破る。

「なぜ、こいつを？ お前なら選びたい放題だろう」

「エスパルサは代々、魔力の強い者が生まれる家系なのは知って

いるだろう？ 実は魔力の強い子を授かる方法があるんだ」

「そんなものが存在するのか？」

「ああ。エスパルサの血を継ぐ者にかぎり、魔力の相性がいい相手との子供は必ず魔力が強くなる。そして、俺の魔力は彼女と最高に相性がいいんだ」

セシリオ様の赤い瞳が私を見据える。どきりと心臓が跳ね上がった。

「それは……本当なのか？」

「ああ。ちなみに相性の見分けかたは門外不出だ。親友の君にも教えられない。ただ、だからこそ大金を払ってでも彼女と結婚したい。一昨年に事故で両親が他界したから、俺は早く跡取りを作る必要がある。そうでなければ、エスパルサ侯爵家は途絶えてし

まうからね」

セシリオ様のご両親は馬車の事故で亡くなっていた。セシリオ様は若くして侯爵家当主になったのだ。

（そういえば、跡継ぎを望まれていたっけ……）

エスパルサ侯爵家がなくなるのは困ると、色々な貴族がセシリオ様に縁談を持ちかけているのは有名な話だ。

しかしセシリオ様は首を縦に振らなかった。まだ若いから独り身でいたいのかと思っていたけれど、どうやら違うらしい。

「俺だって、相性だけで結婚相手を決めるのはどうかと思う。だから彼女と交流することで心を通わせ、自然と交際できればいいと考えていた」

「……確かにお前は卒業後もわざわざうちに来て、こいつに勉強

を教えてくれたよな」

お兄様が小さく頷く。

「言い方は悪いが、金で買う形になってしまふのは俺としても不本意だ。しかし、君の家はそうも言ってられない状況だろう？
どうか、君の大切な妹を俺に任せてくれないか」

セシリオ様が頭を下げる。

名門侯爵家の当主にそんなことをさせるなんてと、両親も私も慌ててしまった。

「決して短くはない時間を友として一緒に過ごしてきたから、俺という人間を君は知っているはずだ。君の信頼を得ている自覚はある」

セシリオ様が言い切る。

その言葉の裏に、私の知らないセシリオ様とお兄様との友情が垣間見えた気がした。

「……そうだな。お前は妹を不幸にするような男じゃない。それに、エスパルサ侯爵家にとっても利益があるなら前向きに考えた。だが、妹の意見を重視したい」

お兄様が私に向き直る。

「どうする？ セシリオと結婚するか？」

お兄様は私に答えを委ねてくれた。

でも、その後ろで両親が縋るような眼差しを向けてくる。血走った目は「絶対に断るな」と物語っていた。

もちろん、断る理由なんてない。ここで拒否すれば、毎晩名前も知らない男に体を売ることになるのだ。

自分のためにも、家族のためにも、どうすればいいのか私も分かっている。だからはっきりと宣言した。

「私がセシリオ様のお役に立てるのなら、喜んで承ります」

——そして私はセシリオ様と結婚した。



結婚から一ヶ月。

夜は夫婦の時間だ。宮廷の仕事も大事だけれど、国としてもセシリオ様に早く子供を作ってもらいたいようで、どんなに忙しくても夕食までには帰宅させてもらえる。

毎晩一緒にベッドで寝ているし、夫婦の時間になるとセシリオ

様は私を抱こうとしてくれた。

——でも、まだ一線を越えていない。

今日もセシリオ様は優しくキスをしてくれて、「可愛い」「好きだよ」って言葉をくれる。愛を囁いてくれるのは、私に気を遣っているからだろう。

優しいセシリオ様は壊れ物を扱うように私に触れてくれるし、乱暴なことは絶対にしない。

でも、なにをされても私はまったく濡れないのだ。砂漠のように乾ききった膣に挿入できるはずもなく、未だに処女のままである。

「……緊張しているのかな？ 無理はしなくていいよ」

潤んでもいない私の秘裂をなぞり、セシリオ様は額にキスを落

としてくれた。

遠ざかっていくセシリオ様に私は声をかける。

「セシリオ様、もう結婚して一ヶ月になります。潤滑油を使うなりして、一度肌を重ねてしまったほうが私の体も慣れると思うのです」

私が濡れないせいで、最後の一線を越えられない。セシリオ様は愛撫だけで終わらせてしまうのだ。

「急がなくていい。実は魔力の強い子供を授かるためには相性がいいだけでなく、お互いに快楽を得ていないといけないんだ。だから、君が気持ちよくなるまでゆっくり進めていこう」

セシリオ様は私を責めることなく、穏やかな口調で伝えてくれる。その言葉の奥に思いやりを感じた。

急かすつもりは微塵もなく、私を感じるようになるまで待つてくれるのだろう。

でも、その優しさに胸が締めつけられる。

「……っ、本当に申し訳ございません」

私は涙目になる。

エスパルサ侯爵家の跡継ぎを産むためにここにいるし、実家の借金も返してもらった。

それなのに、なにもできていない自分が不甲斐なさすぎる。

「気に病む必要はないよ。そもそも、急な結婚だっただろう？
心がついてこなくて当然だ。周囲の期待なんて無視していい」

「セシリオ様……」

「さあ、今日はもう寝ようか。服を着よう」

寢台の隅に押しやった寝衣を手にとると、私に着せてくれる。
本当に素敵な旦那様だし、優しいし、幸せであるはずなのに、
私は悲しくなってしまうた。



日中、セシリオ様は宮廷に出仕している。

私は結婚と同時に仕事を辞め、侯爵家夫人として仕事を担っていた。

もつとも、「子供を作るためにストレスは厳禁」とのことで、大した仕事は任されていない。それに、エスパルサ侯爵家のことで学ばなければならない項目ばかりで、勉強の時間が多い。

「では、今日はここまでにしましょう」

侯爵家に長年勤めている家令が穏やかな口調で伝えてくれる。

この一ヶ月、一度も夫婦の営みが行われていないと知っているはずなのに、家令も私を責めるようなことはなかった。

勉強だって詰めこみすぎないようにしてくる。

「あの、お願いがあるのですが」

「はい、なんでしょう？」

「こちらの薬を準備していただきたくて……」

私はとある本を開いて家令に見せた。家令が驚いたように目を瞠みはる。

「この薬がどういうものか、ご存知なのですか？」

「はい。娼婦がよく使う薬で、麻薬にも似た成分だと書いてあり

ます。これを使えば妻としての役目を果たせると思うのです」

私が開いた本は房事指南書で、家令に依頼したのは「なにもしなくても濡れ、感じやすくなる」という薬だった。

どんなに反抗的な女性でも、これを使えばたちまち快樂の虜となり、従順になるという。

しかもこの薬は胎児への影響はない。

ただし母体には毒素が蓄積されていき、使いすぎれば早死にになってしまうというよくない薬だった。

房事指南書には「三回までなら大きな影響はないが、できれば使用しないほうがいい」と書かれている。

「奥様の健康を害する可能性があります」

「でも、症状が誰かに感染するわけでもありません。旦那様と子

供には無害です。なにより、三回までなら影響がないとここに記載されています」

「それは人によります。体質に合わなければ、それこそ一回目で悪い影響が出るかもしれないのですよ？」

「それも覚悟の上です。妻として一度もお役に立てないことが申し訳ないのです。どうか、お願いします」

私は必死で家令に頭を下げる。

この屋敷の女主人である私は、使用人に気軽に頭を下げるべきではない。それでも、こうしてお願いするしかないのだ。

「……分かりました。繁華街に使いを出せばすぐに手に入るでしょう。今夜、密かにお持ちします」

家令がため息交じりに応じてくれる。

家令だって、今の状況がよくないと分かっているのだろう。私の健康よりも子作りを優先したのだ。

「ありがとうございます！」

これで今夜はセシリオ様のお役に立てる。

——この時の私はそう信じて疑わなかった。



家令は優秀で、早速手に入れた薬を寝室の水差し横に置いてくれた。

セシリオ様には「婦人用の滋養強壮のお薬です」と説明済みらしい。さすがエスパルサ侯爵家の家令とあって、ぬかりない。

夜になり、いつものように「とりあえず始めてみようか」という雰囲気になったところで、セシリオ様のほうから薬を渡してくれた。

「家令から話を聞いている。疲れているようなら、無理をしないほうがいい」

「大丈夫です。今日こそ大丈夫そうな気がするのです！」
私は元気いっぱい返事をする、薬の包み紙を開く。

（あれ？ 粉薬……？）

房事指南書に描かれていたのは錠剤だった。しかし、今手渡されたものは粉薬である。

形状の違いに戸惑いつつ、粉薬もあるのだろうと判断して私はそれを飲んだ。

あの優秀な家令が間違えるはずがない。

セシリオ様は私が薬を飲みこむのを見てから、懷中時計を取り出す。

「どうしました？　なにか、予定でもあるのですか？」

「その薬が効くのは、服用後五分経ってからだ。計っておこうと思つて」

「そうなのですね」

滋養強壯の薬だと信じているセシリオ様は、ちゃんと効果が出てから私に触れてくるつもりらしい。

本当に律儀な人だし、この人のためになら危険な薬を飲んでもいいと思つた。

「効くまでの間、少し話をしようか？　今日、宮廷で愉快なこと

があつて……」

セシリオ様が話してくれる。

宮廷に縁がない私にとってはとても面白い内容で、夢中になっているとあつという間に五分経過した。

しかし、一向に下腹部が濡れる心配がない。

（あれ……？）

薬が効けば勝手に濡れるはず。

それとも私は薬が効きにくい体質で、もう少し時間がかかるのだろうか？

戸惑っていると、セシリオ様が訊ねてくる。

「……さて。君が家令に頼んだ薬は入れ替えた。俺も家令も、君がそんな薬を飲むのを許すはずがないだろう」

「……！」

まさか薬が偽物だったとは思わず、私は言葉を失う。

家令は私の願いを聞き入れずにセシリオ様に報告したのだろう。そして、偽物の薬を用意したのだ。

（だから錠剤じゃなくて粉薬だったんだ……）

きつと、本当に滋養強壯の薬だったのだろう。今日こそセシリオ様のお役に立てるはずだったのにと私は肩を落とす。

「君が怪しい薬を用意しないといけないくらい、俺は下手だったのか？」

「違います！」

「じゃあ……生理的に受け入れられないくらい、俺を嫌いなのか？」

「それも違います」

はつきりと答える。すると、セシリオ様はほっとした表情を浮かべた。

「じゃあ……俺のことは、好きか？」

当然、ここは好きと答えるべきである。

しかし口をついて出た言葉は頭の中で用意した回答とは別のものであった。

「尊敬していますし、憧れてもいます。私の家を助けてくれて感謝しています。素敵な男性ですし、今まで出会った人の中でセシリオ様が一番格好いいです。でも、男女の好きとはちよつと違って……って、え？ どうして私、こんな……」

滑り出た言葉に動揺する。

すると、セシリオ様が仰った。

「さっき君が飲んだ薬は自白剤だ。もちろん、君の体に悪い影響はない。一晚寝れば効果も消える」

「どうして……」

「君と腹を割って話がしたかった。怪しい薬に手を出すくらい君が追い込まれているというならば、その理由を知りたかったんだ」
「どうやら、セシリオ様はこの問題を解決するため、そして私のために自白剤を飲ませたらしい。」

大切にされているということなのに、背中を冷たい汗が流れた。

（自白剤ってことは、誤魔化せない……！）

私が狼狽していると、セシリオ様はどんどん質問してくる。

「嫌われていないのは安心したよ。でも、男として好きじゃない

から俺に触られても感じないのかい？」

「それも違います。私の性癖の問題で」

「性癖？　どんな？」

「……っ」

絶対に言えないときゅつと唇を噛む。

「ダメだよ、言うんだ」

セシリオ様の指先が私の唇をなぞった。

おそらく魔法だ。開かれた口から、私が心の底に押し込めていた願望が音になって紡がれる。

「私、優しくされても感じなくて……。いじめられたいんです」

「……ん？」

「本当は、叩かれないんです」

「た、叩くだと？ どこを？　どうか顔なんて言わないでくれ。

……いや、尻か？　尻を叩く性癖があるらしいし」

セシリオ様は驚きつつも、私の発言をかなり前向きに受け取ってくれた。

否定されなかったことで私の頑かたくな心もほどけていき、するすると話してしまう。

「お尻もいいんですけど……前を……股間を叩いてほしいのです」
「は？　前っ？　どうしてそんな場所を……」

どうしてと聞かれれば、自白剤のせいで素直に白状してしまう。
「十五歳の頃、お兄様の部屋に本を借りに行った時、色事の本を偶然見つけてしまった。そういうことに興味があったので、つい読んでしまったのです。とても過激な本だったのですが、女性が

縛られたり、いじめられる内容ばかりで……」

「あいつのせいか……」

セシリオ様は眉間の皺を揉む。苦悩している時の癖だ。

「普通なら、そういう本に惹かれないと思うのです。でも、私はすごく気になってしまっただけ。女性をいじめるといっても、苦痛を与えてではなく、恥ずかしい言葉を言ったりして、女性がとても気持ちよさそうでした」

「……そうか。苦痛系でなかったのがせめてもの救いだ」

「お尻を叩く行為もあったのですが、その途中で一回だけ股間を叩く場面があって、私は昂ぶってしまったのです。その描写が忘れられなくて……いつしか、私もされたいと思うようになりました。そんなこと絶対におかしいって、自分でも分かっているのに

……」

私は貴族令嬢としてしかるべき教育を受けていた。平民とは違い、貴い血が流れているのだから、淑女であれと子供の時から言われつづけていたのだ。

だからこそ、人前での振る舞いは気をつけていた。

決して大声で笑うことはせず、口元を押さえて上品に微笑む。急いでもいいも走ることなく優雅に歩く。

どれだけ許しがたいことがあっても、声を荒らげてはいけない。そんな淑女という殻の中で、破廉恥な願望がどんどん肥大化していった。

淑女として振る舞えば振る舞うほど、外に向けた清廉さと反比例するかのように、淫らな欲求が高まっていく。

その結果が「股間を叩かれない願望」だ。

まさか普通の行為では濡れないほどだなんて、私自身も思わなかった。初夜でセシリオ様がどんなに尽くしてくれても反応せず、それはもう絶望した。

だからこそ、怪しい薬に手を出してまでなんとかしようと思つたのに——墓場まで持っていくべき秘密を自白剤によって暴かれてしまった。

でも、セシリオ様は私の恥ずかしい告白を馬鹿にすることなく受け止めてくれる。

「君の望みは承知した。それで、他にはどんなことをされたい？ この際だから、すべて吐き出してほしい。俺はそれを受け入れられる器量はある。怪我をとまなう行為はさすがに無理だけど、

苦痛系の内容ではなかったんだろう？」

これ以上、自らの恥部を晒してはいけない。

そう思うものの、薬のせいで正直に話してしまった。

「いやらしい言葉をいっぱい言われたいです。言葉で辱められた
いです。ブスとか醜いとかの悪口じゃなくて、淫乱とかいやらし
いとか羞恥系で。あと、その……俗語を……おまんことか、おち
んちんとか言わされたいし、言いたいです」

今まで一度も口にしたことがない卑猥な単語が口から飛び出
てくる。

ただ、お兄様の本を読みながらその字面が出てくると妙に興奮
したのは確かだ。

（セシリオ様、呆れていないかしら？）

不安になりながら様子を窺うと、セシリオ様はごくりと喉を鳴らした。

気のせいでなければ、私の淫語に反応したような……？

「そ、そうか。分かった。他に希望は？」

「潮を吹いてみたいし、おもしろいも見てもらいたいです。クリトリスを引っ張ったり、指先ではじいて、いじめてもらいたいです。恥ずかしいこといっぱいされて、でも最後にはおまんこ撫でてよししてほしいです」

自白剤のせいで理性の籠が外れて、とんでもないことまで言うてしまう。

（いじめてほしいのに、よしよししてほしいって我が儘すぎる）
自分でも呆れてしまうけれど、セシリオ様は真面目な顔で聞い

てくれた。

「分かった。話してくれてありがとう。反応が悪かった理由が気になっていたけれど、君の希望に添えなかったからだね。俺が悪かった」

「謝らないでください。悪いのは私なんです。私に変態すぎるのがいけないんです」

「いや、俺たちはもう夫婦になったんだ。自白剤を飲まなくても、君の意思で伝えてくれるほどの信頼関係を築けなかった俺に問題がある。でも、もう大丈夫だ。今日からは君の望むことをしてやる」

そう言い終わるや否や、セシリオ様が私を押し倒してくる。

「叩かれないんだろう？」

「……！」

耳元で囁かれて全身が熱くなった。

（本当に叩いてくれるの……？）

期待に胸が膨らむ。

それからセシリオ様はいつものように私の寝衣を脱がせてくれた。でも、ショーツだけは残す。

「最初だから、下着越しにやってみようか？ 足を開いてみて」

「……っ」

私は仰向けになったまま、両膝を立てて左右に開いた。

下腹部を見たセシリオ様が片眉を上げる。

「……！ なにもしてないのに、もう濡れてる。形が分かるくらいにぴったりと布が張り付いてるね」


指摘されると羞恥で頬が染まる。それと同時に、新たな蜜が溢れた。

——そこが濡れているのは、自分でも分かっていた。

「恥ずかしい告白をして、いやらしい言葉を口にしたら興奮してしまいました」

自白剤のせいで素直に説明してしまう。

「そうか。俺の妻は本当に淫乱で変態なんだね」

「ああ……」

私の希望通り、セシリオ様が言葉攻めをしてくれる。しかも丁度いい具合の辱め方だった。

「嬉しいです」

心からそう伝えると、セシリオ様は瞳を細める。

「じゃあ、もつと喜ばせてあげる。……叩くよ」

「はい」

まさか、股間を叩いてもらうという夢が叶うなんて予想もしていなかった。

今からその瞬間がくるのだと思うと、期待で微かに震えてしまふ。

セシリオ様がゆつくりと手を振り上げた。

（ああ、私、とうとう——）

ぺちいん♡

「おっ♡♡♡♡」

大きな掌に股間を打ちつけられた瞬間、頭の中が真っ白になった。

腰を跳ね上げ、痙攣しているみたいにへこへこ♥と揺らしてしまおう。

全身が硬直し、足の指先がぎゅっと丸まった。

それから数秒後、ようやく体の力が抜けてお尻がシーツに沈む。「まさか、君……今のでいったのか？　すごい声が出ていたよ。

いつも小鳥のようにさえざる君から、あんな低い声が出るなんて……」

セシリオ様が顔を覗きこんでくる。

もちろん私は素直に白状した。

「イきましたあ……♥ 処女まんこ叩かれて♥ みつともない声でイっちゃいましたあ♥♥♥ オナニーしたことないからっ、イクの初めてだけど、これ、絶対アクメ決めちゃいましたあ♥



絶頂という現象は、お兄様の秘蔵の本にいつぱい出てきたから知識を持っている。でも、一度たりとも経験したことがなかった。

ただ、今なら分かる。

セシリオ様に叩かれた瞬間、幸せがおまんこから全身に広がって快樂に溺れた。

これ、絶対イってる♡♡♡♡♡

処女なのにおまんこ叩かれて、思いつきりイっちゃった♡♡♡
無様に腰へこへこしちゃった♡♡♡

気持ちいい♡♡♡♡♡

「そうか、イったのか。淑女らしからぬ、すごい声を出していたね。また聞かせてくれるかな？」

セシリオ様が再び手を打ちつけてくる。

ぺちん♡ ペちん♡ ペちん♡ ペちん♡

「おっ♡♡♡ おおっ♡♡♡ あうっ♡ おあっ♡♡♡」

ああもう、気持ちよすぎて情けない声が出ちゃうっ♡♡♡♡♡
セシリオ様に汚い声を聞かれちゃう♡♡♡

でも止まらない♡ おまんこ叩かれるの気持ちいい♡♡♡

叩かれるたび、私は小さなアクメを決めちゃう♡♡♡

嬉しい♡♡♡ 嬉しいの♡♡♡♡♡

「ふっ、ふふふふ。本当にすごい声だね。そんなに気持ちいい

のかい？」

「はいっ♡」

「これを見て」

セシリオ様は叩くのを止めて、私の顔の前に掌を近づける。

男らしい大きな掌は濡れ光っていた。

「下着越しなのに、こんなに濡れてしまったんだね」

「あぁっ……恥ずかしいです♡」

「直接叩いてほしかったら、下着を脱いでおねだりしてごらん？」

「……！」

さすがセシリオ様、拙い説明でも私が望んでいることが分かったみたい♡

こんな風に恥ずかしい命令されたかったの♡♡♡

私は腰を上げてショーツを脱ぐ。

びちょびちょになっていたおかげで、糸を引きながら布が離れていった。

「セシリオ様 ♡ 私のないらしい処女まんこ、叩いてください ♡

♡ ♡

「ああ、もちろん。僕の大切な妻の望みなら、喜んで」

セシリオ様が手を振りかぶり、そして――。

ぺちいんっ ♡ ♡ ♡

「おっあおあお ♡ ♡ ♡ ♡」

殴打の音だけでなく、粘着質な水音まで響いちゃう ♡ ♡ ♡

さつきよりも刺激が強くて、セシリオ様の体温を感じた。

ぺちいんっ ♡ ペちゅっ ♡ ペちいん ♡ ♡ ♡

「おっ ♡ ♡ ♡ ほお ♡ あうっ ♡ ♡ ♡」

叩く力は弱いから、手加減してくれているのが分かる。

でも、私は痛くしてもらいたくないんじゃない。おまんこを叩かれ

るといふ行為に興奮するのだから、これで十分だった。

それに、びしょ濡れになっているせいで大きな音が鳴っちゃう



恥ずかしくて気持ちいい♡♡♡♡♡

「おあっ♡♡♡ セシリオ様♡ 処女まんこなのはっ、今だけだ

からあ♡♡♡ 今のうちに、いっぱいじめてっ♡♡♡♡♡」

「……！」

セシリオ様の手の動きが止まる。

「今のうち、というのは……」

「だって♡ これから、セシリオ様の大きなおちんちんで♡ 処

女膜、貫かれちゃいますっ♡♡♡ 処女まんこから、セシリオ様

専用まんこになるんです♡♡♡♡♡」

「ああ……！」

セシリオ様の頬が上気する。

赤い瞳の奥に、劣情が滾っているような気がした。

きつと、セシリオ様も興奮してる♡

（さんざん叩いた私の処女まんこに、おちんちんをぶちこむ想像をして昂ぶってるんだわ♡♡♡♡♡）

ぺちいいんっ♡♡♡♡♡

「おんっ♡♡♡」

セシリオ様は打ちつけた掌を私のおまんこに押しつけたまま、ぐりぐりと刺激してきた。

膨らんだ淫唇も、クリトリスも、掌で押し潰されるっ♡♡♡

柔らかい部分をぐりぐりされて、叩かれるのとは違う快樂が全

身に広がっちゃう♡♡♡

これも、すごく気持ちいい♡♡♡♡♡

「おっあゝ♡♡♡」

自白剤を飲まされていても、気持ちいいと言えずに嬌声だけが唇から漏れる♡

だって喘ぐのにいっぱいいで、喋れない♡♡♡

「処女とは思えないほどぐちゃぐちゃだ。こんなに濡らして恥ずかしくないのかい？」

「んおっ♡」

「こうして、圧迫されるのもいいのか？」

「おゝゝ♡♡♡」

私はこくこくと頷く。

おまんこ押し回されるの気持ちいい♡♡♡♡♡
掌でクリトリスが潰されるの、感じちゃう♡♡♡♡♡

「なんて卑猥な処女まんこなんだ」

ぺちいん♡

「こんなことで喜んで、びしょ濡れにして」

ぐりぐりぐりぐり♡♡

「情けないアクメ決めて」

ぺちゅんっ♡♡♡

「俺の妻がこんなに淫乱だったなんて、驚いたけど」

ぐりゅんぐりゅん♡♡♡♡

「大好きだよ」

ぺちいいいいいん♡♡♡♡♡

を作った。

これ、おしっこじゃない♡ 潮だ♡♡♡

処女なのに潮吹いちゃった♡♡♡♡

「はははははっ。潮を吹くほど気持ちよかったのか。そうか」

私が意識朦朧としている横で、セシリオ様は嬉しそうに笑っていた。

「おめでとう。潮を吹きたいという望みが叶ったね」

「ああ……、ありがとうございます♡♡♡」

おまんこがじんじんしてる。

もうこれ以上気持ちいいことはないだろうと思った次の瞬間、セシリオ様の細長い指が私のクリトリスを摘まみあげた。

ぎゅうううううう♡♡♡

「おんう ♡♡♡」

「ほら、クリトリスもいじめてほしいんだろう？　こんなに勃起して……まるで女の子のおちんちんじゃないか」

「おん ♡」

「クリちんぽ、しこしこされたいんだろ？」

「あああっ ♡♡♡♡」

セシリオ様の口から紡がれるクリちんぽっていう言葉があまりにもえっちすぎて、軽くアクメ決めちゃう ♡

ぷしゅうって、また潮が出ちゃう ♡♡♡

「ほらっ」

セシリオ様が私のクリちんぽを扱いてくる ♡

しこしこしこしこ ♡

「おおおおお♡」

おまんこを叩く手は優しかったのに、クリトリスを摘まむ力は強い。

でも、痛くなくて気持ちいい♡♡♡

クリちんぽがばんばんに勃起して、今にもはちきれそう♡♡♡
すごい、これすごい♡♡♡♡♡

女の子の敏感な部分を容赦なくしこしこされて、全身が気持ちいい♡♡♡♡♡

「お、あうんっ、あああゝゝ♡♡♡ ぐうううううううう

♡♡♡ あっ、ああっ、また出ちゃうっ♡♡♡♡♡」

ぶしゃあああああ♡♡♡

腰をかくかくさせ、潮を撒き散らしながら大きなアクメを決め

ちやう♡

最高に幸せ♡♡♡

「君はクリトリスが弱いんだね。まだそんなに触ってないのに、こんなにイくなんて。このいやらしいクリちんぽ、もつといじめ倒してほしいんだろう？」

「あうう……もつと処女まんこもクリちんぽもいじめてほしいのにつ、いくたびに、奥が切ないんです♡♡♡ これ、セシリオ様のおちんちんで突いてもらわないと、ダメなんです♡♡♡」

「……ッ！」

「お願いです♡ おちんちん挿れてっ、旦那様♡♡♡ 私の処女を散らしてください♡ 指じゃ届かない一番深いところを、おちんちんでいじめてくださいっ♡♡♡♡♡」

「……分かった」

脱ぐ時間も惜しいのか、セシリオ様は前をくつろげておちんちんを取り出す。

それを見て、私は驚いてしまった。

(すごく大きくなってる♥♥♥)

今までに行為をしようとした時、セシリオ様の裸を見たことがある。その時だっておちんちんは勃起していたし、大きいと思っていたけれど、比べものにならないくらいギンギンして太くなってる♥

おちんちんって、こんなに大きくなるの？

割れた腹筋につきそうなくらい反り返ってる♥♥♥

ぶっとい筋が浮き出てびくびくしてる♥♥♥

大きな亀頭に先走り液が滲んで、すごくえっち♡♡♡

もしかしてセシリオ様、私の処女まんこを叩きながらおちんちん硬くしてたの？

嬉しい♡♡♡♡

（こんな凶悪なおちんちんが、これから私のおまんこに入ってくるんだ♡）

待ちきれなくて、私は淫唇に手を当ててくぱあ♡と割り開いた。叩かれて、ぐりぐりされて、赤くなった処女まんこをセシリオ様に見せつける。

「セシリオ様あ♡♡♡」

早く早くと腰を揺らす。

セシリオ様は少しだけ躊躇した後、亀頭をひくつく蜜口にあて

がった。

ちゃんと内側まで指でほぐしてから挿入したほうがいいことは、私だって知ってる。

この一ヶ月、全然濡れなかったせいで、セシリオ様が私の中に触れてこなかった。

だから、私のおまんこはおちんちんどころか、指もまともに受け入れた経験がない。真正正銘の処女まんこ。

だからセシリオ様も、すぐに挿入していいのか躊躇ったんですよ？

でも、セシリオ様は欲に負けちゃったみたい。

おまんこくぱあ♥しておねだりした私を見て、挿れたくて仕方なくなっちゃったんだ♥

今までずっと私を大切に、優しく扱ってきたのに、この状況に理性が飛ぶほど興奮してるんだ♡♡♡

そんなセシリオ様を見てると、私もますます興奮しちゃう♡

（指じゃイヤ。いきなりおちんちんで、私のおまんこをいじめてほしい）

挿入しようと亀頭をあてがったものの、なけなしの理性がまだ残っていたのか、セシリオ様の腰は動かない。

「挿れて♡ 早く、おちんちん挿れてっ♡ 焦らされるほうがつらいです♡」

「い、いいのか？ もし痛かったら、遠慮しないですぐに言ってくれ」

「自白剤のせいで、遠慮できない状態になっています。だから私

の言葉をすべて信じてください」

「……分かった。……それでは、いくよ」

セシリオ様がゆっくり腰を進めてくる。

ずぷぷぷう ♡♡♡

「あっ、あゝゝゝ ♡♡♡」

外側から叩かれたおかげで、私のおまんこの内側はちゃんとほぐれていた。

大きすぎる雄杭を拒むことなく飲みこんでいく。

ぐちゃぐちゃに濡れていたから滑りもいい。

引っかからずに、ずぬう♡と、おちんちんが入ってくる。

でも、順調なのは途中までだった。

浅いところは平気だったのに、奥に進むにつれどんどん痛くな

つていく。

奥までちゃんと濡れていても、侵入を拒むように体が強張る。

「いつ、痛い……！」

思わず呟くと、セシリオ様は腰の動きを止めた。

「一度抜こう」

「ダメっ！ 止めないで！ 痛くても、処女まんこをこじ開けられてると思うと、興奮して心が気持ちいいの♥♥♥」

——そう、体の痛みと反比例するみたいに私は喜びを感じていた。

「私の中が、セシリオ様の形にされてる痛みだもん♥ こんなに大きいんだから、痛くて当然♥ セシリオ様のぶっといおちんちん専用になるように、私のダメダメな処女まんこをしつけてくだ

さいっ ♥♥♥」

「そ、そうか。それが君の望みか。……しかし、痛いだけでは可哀想だ。だから……」

セシリオ様の手が結合部に伸ばされる。

そして、びんびんに勃起したクリトリスを摘まみあげた。

ぐにいいいっ ♥

「おんっ ♥♥♥」

クリトリスが押し潰される感覚に、甘くイっちゃう ♥

「外側はちゃんと気持ちよくなるうか。クリちんぽをしこしこしながら、おまんこを俺の形にしてあげるからね」

「あん ♥ ありがとうございます……っお ♥♥♥」

クリトリスの根元から先端までごしごしと扱かれる ♥

やっぱり、セシリオ様はクリトリスへの刺激が容赦ない♡♡♡

クリトリスは思いきりいいじめていい場所だと思ってるの？

大正解です♡♡♡♡♡

クリちんぼへの強い刺激、最高に気持ちいい♡♡♡

「おっ♡♡♡ほ♡♡♡」

クリトリスの快樂が、おまんこの痛みより勝る。

恍惚として体の力が抜けると、その隙に一気にずぬうううう♡
っっておちんちんが奥まで入ってきた。

めりめりめりめりい♡♡♡

私のおまんこが無理矢理こじ開けられる♡♡♡

すごい♡ セシリオ様のおちんちん、とっても長い♡

どこまで入ってきちゃうの♡♡♡

「セシリオ様っ ♥ 気持ちいいです ♥ ♥ ♥ おんっ ♥」

「ああ。奥からどんどんえっちな汁が出てきて、俺のちんぽを濡らしてくるからッ、ンっ、分かるよ……！」

セシリオ様の額には汗が滲んでいた。

口角が緩んでる ♥

（セシリオ様も気持ちいいんだ ♥ 私のおまんこで感じてくれる ♥）

私とは違って品のいい嬌声を上げながら、セシリオ様は腰をさらに進めた。

ごちゅんっ ♥ ♥ ♥ ♥

「ああゝゝゝ ♥ ♥ ♥」

一番奥の行き止まりに立派な亀頭がぶつかった。

セシリオ様の腰が私の腰と密着する♡

「はあっ、はあ——。全部っ、ン、入ったよ……」

上擦った声で教えてくれる。

（セシリオ様のおちんちんが全部、私の中に……♡♡♡）

嬉しくてたまらない♡

私とうとう、妻としての役目を果たせたんだ♡

ちゃんとセシリオ様の女になったんだ♡♡♡

「嬉しいですっ♡♡♡」

ぶしゃああああ♡♡♡

結合部から水しぶきが上がる。

嬉しさのあまり、潮を吹いちゃった♡

セシリオ様の割れた腹筋が、私のえっちな汁で濡れててらてら

と光る。

「……っ、ふふふ。はははははっ！　とうとう、君と……！」

ぎゅううううう　♡♡♡

思いきりクリトリスを引っ張られた。

「あうんっ　♡♡♡♡♡」

はしたない喘ぎ声が出ると共に、唇が開いて舌を突き出してしまふ。

（やだっ　♡　今、絶対だらしがない顔してる　♡♡♡♡♡）

慌てて唇を閉じようとする、それより先にセシリオ様の顔が近づいてきて唇を奪われた。

じゅるじゅる　♡　れろれろれろお　♡♡♡

「……んむう」

思いきり唇を吸われる♥

肉厚な舌が差しこまれて、私の口内を掻き回す♥♥♥

(こんな激しいキス、初めて♥♥♥)

当然、深い口づけをしたことは何度もある。

それでも、優しく舌を絡め合うだけだった。

こんな風に、乱暴に私の口を蹂躪するようなキスは初めてで、

気持ちよくなっちゃう♥

「ンンっ、はあっ、あ……っ！ 君がッ、好きだ……♥♥♥」

セシリオ様は私の名前を呼びながら、ずちゅずちゅ♥と腰を動かしてきた。

雁首が私の膣壁を引っかいて、甘く痺れる♥♥♥

すごい♥ もう、ほとんど痛くない♥♥

キスされながら硬いおちんちんで擦られるの気持ちいい♡♡♡

「おっん♡ おお♡ あうっ♡」

私はキスの合間に淫らな嬌声しか紡げない。

それなのにセシリオ様は、器用に私の名前を呟く♡♡♡

「ああっ……好きだ、愛してる……っ♡♡♡」

掠れた声が色っぽい♡♡♡

セシリオ様って、気持ちいい時にこういう声を出すんだ♡

いつも以上にセクシーな声で囁かれ、耳の孔まで犯されている

気がして最高にきゅんきゅんする♡

「んおっ♡♡ あっ♡♡ あああ~~~~♡♡♡」

おまんこがぎゅうつ♡って、セシリオ様のおちんちんを締めつ

ける。

「ク……っ。で、出そうだ……！」

「はいっ♡　ください♡♡♡　セシリオ様の精子、私の中にいっ
ぱい出してください♡　私も、イぐつ、イきそううううあぁあ
ゝゝゝ♡♡♡」

「ツ」

び
ゆ
る
る
る
る
る
る
る
う
♡
♡
♡
♡
♡
♡
♡
♡
♡
♡

（熱いつ♡奥に、熱い液体をいっぱい叩きつけられてる♡♡♡）
 びゅっ♡♡♡どくどくどく♡♡♡

おちんちんが何度も打ち震えながら、
精液を吐き出してくる♡

(すごい♡♡♡いっぱい出てる♡♡♡)

び
ゆ
る
う
う
う
う
う
…
♡
♡
♡

ようやく吐精が止まった。

でも、おちんちんはコチコチに硬いまま。

あれ？ 射精したら柔らかくなるんじゃないの？

「……はあっ♡」

セシリオ様は私の頬にキスをした後、おちんちんを引き抜く。
栓を抜かれたせいで、純潔の証が混じった白濁液がどぴゅっ♡
と秘裂から溢れ出た。

いっぱい出されたおかげで、滝みたい精子が流れ出る♡

まるで、私がおまんこから射精してるみたい♡♡♡

「ああああ……」

精子が流れる勢いが落ちると、セシリオ様は私の股間に掌を当てた。

でも、ぐりぐり押すのではなく、優しくなでなでしてくれる。

「いい子だ。よく頑張ったね」

「あっ♥」

セシリオ様は私の望み通り、最後によしよししてくれたのだ。
ちゃんと覚えててくれて嬉しい♥

（でも……最後？ もう終わり？ え？ だって、繋がってる時間って短かったよね？）

挿れられてから射精まではあっという間だった。

気持ちよかったけど、まだまだ物足りない。

（それに、セシリオ様のおちんちんもまだ勃ってる）

大きなおちんちんは萎えることなく、びんびんに天を向いていた。

「セシリオ様。これで終わりですか……？」

「ああ、今日はこのくらいにしておこう。破瓜の血が出ているだろう？ 粘膜が傷ついている証拠だ。今日は体を休めたほうがいい」

「そんな……。私、まだできます。セシリオ様だって、おちんちん大きいままですよね？」

もっと気持ちよくなりたくておねだりする。

するとセシリオ様は股間を撫でていた手を離して振りかぶると、それを打ちつけてきた。

ぺちいいいいん♡♡♡♡

「おっおあゝ♡♡♡♡」

不意打ちのおまんこ叩きでいつちゃう♡♡♡

愛液と精液でぐちゃぐちゃのおまんこを叩かれるの、気持ちよ

すぎる♡

「明日になったら、また気持ちよくしてあげよう。だから、今日
はもう寝ること。そうじゃないと、明日は叩いてあげないよ。…
…いいね？」

「は、はいっ♡ 明日、いっぱい叩いてください♡♡♡」

「もの分かりのいい子だ。よしよし」

セシリオ様はもう一度おまんこを撫でてくれる。

叩かれてじんじんした場所を優しく撫でられると、幸せな気持ちになった。

「ほら、今日はもう疲れただろう？ おやすみ」

温かい手が、ずっと股間をなでなでしてくる。

あまりの心地よさに、私はそのまま眠りの淵に落ちていった。

第二章

ラブシーンまでジャンプ

翌日、目が覚めると隣にセシリオ様の姿はなかった。

（あれ？ 今日と明日はお休みのはずなのに……）

侯爵家の女主人として、夫の宮廷出仕日はきちんと覚えている。今日はゆっくり寝ていいはずなのにと思いつつ体を起こして時計を見ると、その時刻に驚いた。

「う、嘘っ。もう十一時過ぎてる？」

朝どころか、もう昼だ。一気に意識が覚醒する。

こんな時間まで寝ているなんて、熱が出た時以外では初めてだ。
（当然、セシリオ様は起きていらっしやるわよね）

私は飛び起きて身支度を始めた。

体はどこも痛くない。セシリオ様が一回で終わらせてくれたおかげだろう。

軽く自分で整えてから呼び鈴を鳴らしてメイドを呼び、女主人として恥ずかしくない装いになった頃にはもう正午に差し掛かるうとしていた。

（セシリオ様に呆れられちゃうかも）

書齋で仕事をしているのだろうか？

とりあえず挨拶に行こうと思ったところで、私の起床を知らされたのだろう家令がやってきた。

「おはようございます、奥様」

「おはようございます。あの、昨日は申し訳ございませんでした。気を遣っていただいたみたいで……」

私が怪しい薬を飲もうとしているとセシリオ様に知らせてくれたからこそ、夫婦問題は無事に解決した。

家令の機転のおかげである。

「とんでもございません」

家令は淡々としていて、余計なことを言っていない。その対応がとても助かる。

おそらく、昨日一線を越えたことは把握していると思う。

でも、セシリオ様が夫婦の情事をべらべらと言い触らすようには思えない。

私の恥ずかしい秘密は、きっと知らないはず。

「ところで、セシリオ様は書斎にいらっしゃいますか？」

「セシリオ様は奥様のご実家に向かわれました。昼食は済ませて

いらつしやるとのことです」

「えっ。私の家に？」

セシリオ様が親友であるお兄様と会うのは珍しくはない。

侯爵邸に呼べばいいのに、わざわざ男爵家まで足を運ぶのだから、よほど話したいことがあるのだらうと今までは思っていた。

しかし、このタイミングでの訪問は勘ぐってしまふ。

私のおかしな性癖は、お兄様の蔵書を読んだ影響だと言ってしまった。

（もし、それを話していたら……）

家族には絶対に知られたくない。

男同士の社交では低俗な内容も話題のうちらしいけれど、セシリオ様はどこまでお兄様に話すつもりだろうか？

（気になって仕方ない！）

私はそわそわしながらセシリオ様の帰りを待つことにした。



ティータイムの時間にセシリオ様はお戻りになり、そのまま同席された。

セシリオ様は片手を上げてメイドを下がらせる。

（二人きりだわ）

今なら内緒の話ができると、私はセシリオ様に訊ねた。

「私の家に行っていたと聞いたのですが……」

「ああ、君の兄に会ってきた」

「……！ あいつ、もしかして例の本のことを……？」

はらはらしながら伺う。

（ばらされていたら、どうしましょう？）

そんな私の心配をよそに、セシリオ様は呆気なく否定してくれた。

「言うはずがないだろう？　そもそも、昨夜のことが知られたら俺はあいつに殺される」

「よ、よかった……」

私はほっと胸を撫で下ろした。

セシリオ様に知られるより、お兄様に知られるほうが恥ずかしいし絶対に嫌だ。

「でも、殺されるっていうのは大袈裟です」

「君が知らないだけで、裏でのあいつはすごいシスコンだぞ？」

君が魔法学校に入学する前なんて、毎日のように君の話を聞かされていたんだからね」

「ひえ……っ」

まさか、自分の知らないところで話題にされていたなんて思いもしなかった。

お兄様がろくでもないことまで話してないか、今度はそちらが気になってしまう。

「だから俺は、君が入学してくるのがとても楽しみだった」

セシリオ様は微笑む。その穏やかな表情から、悪い話は伝わっていないと思いたい。

「ところで、今日君の家に行った理由だが。あいつから、少しずつ

つでも借金を返済したいと言われているね。支度金として渡した金だから気にするなと言っても、あいつなりの矜持があるんだろうな。俺に甘えない、そういうところが好きなんだ」

「……！」

お兄様は魔力が強いから、セシリオ様の友人として選ばれたのかと思っていた。

でも、どうやら違う。お兄様の性格を気に入っているみたい。

「でも、それならお兄様をここに呼べばよかったのでは？」

「あいつはしつかりしていても、君のご両親はいささか頼りない。借金を返せるような状況なのか、屋敷内の様子をこの目で確認しておきたかったんだ。荒れているようなら辞退しようと思っただね」

「……はい。お父様は本当にそうですね」

はつきりと「頼りない」と言われたら、素直に頷くしかない。
なにせ、騙されたのは今回が初めてではないのだ。

目先の金と甘い言葉に釣られて、嘘の融資話や詐欺に引っかかってしまう。

それでも家が傾くほどの金額じゃなかったし、事業を始めたお兄様が肩代わりして窮地を凌いでいた。

そして、とうとうとんでもない借金を負うことになったのだ。
セシリオ様のおかげで助かったけれど、確かに心配である。

「これに懲りて、二度と怪しい話に乗らなければいいのですが……」

「それも釘を刺してきたから大丈夫だ」

お父様にとってセシリオ様は義理の息子であるものの、エスパ

ルサ侯爵という肩書きの前では大きな態度を取れないだろう。

きつと、素直にいうことを聞いてくれるはずだ。

「とりあえず屋敷の雰囲気は大丈夫そうだったし、あいつの事業計画についても色々と話聞いてきた。……そして、あいつの部屋で一人になれる時間を作った。秘蔵の本を見つけたよ」

「えっ！ あれを読まれたのですか？」

お兄様の本はとんでもない内容だ。

昨夜、細かくは語らなかったけれど、あれを読んで興奮したと思われるのは恥ずかしい。

戸惑っていると、セシリオ様は自慢げに言う。

「妻のためには当然だ。そういう行為をするならば、きちんと学んでおくべきだろう？ 三冊あったな。俺は速読が得意だから、

すべて目を通した」

「す、すごい……」

セシリオ様の仰るとおり、お兄様は卑猥な本を三冊持っていた。三冊ともそれなりに分厚かったはずだ。

一人の時間がどれほどあったのか知らないけれど、私なら一冊も読み終われない。

（速読もできるんだ……）

セシリオ様の特技を新しく知れて、なんだか嬉しくなる。

「昨日は突然だったからあの程度しかできなかったが、今日は大丈夫だ。……これを見てくれ」

セシリオ様は自信ありげに書類を差し出してくる。

「え……？　まさか、私に呆れて離縁状を……？」

「早とちりしないで、よく見てくれ」

離縁状でなければなんだろうと思いつつ書類に目を通すと、そこにはずらりと卑猥な単語が並んでいた。

「こ、これは……？」

「あいつの本に載っていた行為だ。君だって本の内容のすべてを経験したいわけではないだろうし、したい行為と絶対に避けたい行為があるだろう。それを事前に把握しておきたい」

セシリオ様はペンを差し出してくる。

「各項目の横に、5段階で数字を記入してくれ。1が絶対に嫌な行為、3が普通、5が嬉しい行為だ。君の価値観を事前に認識できれば、もっと気持ちよくしてあげられると思う」

「……！　ここまでしてくださるなんて……」

セシリオ様は私の性癖に真摯に向き合ってくれるつもりらしい。わざわざ確認表を作るなんて真面目すぎる。

「ありがとうございます、セシリオ様。記入しますね」

書類には、昨日私が好きだと伝えた股間叩きから、縄、張形、鞭打ちまで、お兄様の本に書かれていた項目がずらりと並んでいた。

昨日の行為項目まで書かれているのは、私がそれをどう評価するのか参考値として把握しておきたいのだろう。

（股間叩きは5、尻叩きは、太腿叩きは2ね。鞭は……音だけ大きくなくて痛みを感じないなら4かしら？ まあ、洗濯バサミまであるのね！ ええと、それから……）

私はさくさく記入していく。すべてを数字で評価するのに、そ

う時間はかからなかった。

「こちらになります」

記入を終えた確認表を差し出すと、セシリオ様が早速確認する。

「ふむ、なるほど。それと、合い言葉も決めておこう。嫌だと言ってもやめてもらえないという状況も好きなのだろう？ その日の体調にもよるだろうし、どうしても無理だという時は合い言葉を伝えてほしい。そしたら、俺もすぐに止めるから」

「分かりました。嫌とかダメとかは言いたいので、それ以外の単語となると……」

合い言葉についてはお兄様の本にも載っていた。特殊な性交をする男女の決まりごとらしい。

でも、これといった単語が思い浮かばなくて悩んでしまう。

「ええと……」

「悩むようなら、あいつの名前にしよう。行為中には絶対に口にしないだろう？　俺だって、あいつの顔が浮かんたら冷静になれる」

「はい、分かりました。では、お兄様の名前で」

これなら絶対に忘れない言葉だし、丁度いい。

さすがセシリオ様は頭がいい。こんな素敵な男性が夫だなんて、今でも信じられない。

「ところで、セシリオ様が私にしてほしいことはありますか？

私もなにかしたいです」

私がここまで性癖をさらけ出したのだ。

セシリオ様も秘密の性癖があるに違いない。

わくわくしながら答えを待つと、セシリオ様は優しげに瞳を細めた。

「俺の子供を産んでくれるだけで十分だよ」

「……っ」

その回答に胸がずきんと痛む。

（そうだ……。私、セシリオ様の子供を産むためにここにいるんだ……）

セシリオ様が優しいから、つつい舞い上がってしまった。

愛されて結婚したわけじゃない。いわば、私はセシリオ様に買われたようなものだ。

勉強を教えてくれたのだって、魔力の相性がいい私に近づきたかったから。

おかしな性癖に付き合ってくれるのも、私がちゃんと感じて魔力の強い子供を作ることが目的だ。

すべてはエスパルサ侯爵家のためであり、私のためじゃない。分かっていても胸がもやもやする。

その心の内を知られたくなかったから、私は笑顔を作ってみせた。



夜になった。

昼間はちよつと落ち込んでしまったけど、うじうじ気にしている暇はない。理由はどうであれ、セシリオ様は私の特殊な性癖に

向き合ってくれる。

こんな素敵な旦那様は他にいないと思う。実家も爵位を失わずに済んだし、私はとても幸せ者なのだ。

今も、セシリオ様は私を喜ばせようとしている。その大きな手には洗濯バサミが握られていた。

ティータイムで記入した確認表の項目には、道具を使うものはいくつかあった。

しかし、すぐに新品が手に入るのは洗濯バサミだけだったのだ。倉庫に新品がストックしてあるので、それを拝借している。

もともと、普通の洗濯バサミは人体に使用することを想定していないので挟む力が強い。

だからセシリオ様は魔法でバネを緩めた。いきなり私で試すの

ではなく、自分の指先に挟んで具合を確かめている。

その様子を見ながら、私の胸は高鳴っていた。

（今からあの洗濯バサミで私……っ♡）

想像するだけでお股がじゅん♡と濡れてしまう。

「よし、これなら大丈夫だろう」

すべての洗濯バサミの具合を確かめてから、セシリオ様は私を見た。

「さあ、脱いで」

「はい♡」

セシリオ様に見られながら、一枚一枚脱いでいく。

一糸纏わぬ姿になり、ベッドの上に膝を揃えて座った。

寒くもないのに乳頭がつんと尖って主張している。洗濯バサミ

で摘ままれるのを想像して、乳首を大きくしてしまったのだ。

「ふっ、ふふふふ。まだ触ってないのに、どうしてこんなになっ
っているんだろうね」

セシリオ様が指先でつんつんと乳首をつつく。

「あうっ♡」

「洗濯バサミを見ただけで、乳首が勃起するほど興奮したのか
な？」

「はい♡ 興奮しちゃいました♡」

今日は自白剤を飲まされていない。

でも、セシリオ様への信頼があるから素直に口にする。

わざわざお兄様の本を読み、確認表まで準備してくれたのだ。
恥ずかしがるのではなく、私も全力でこの状況を謳歌し、いつ

ばい感じてセシリオ様の子供を授からなくてはいけない。

(だって、それが私の役目なもの)

胸の奥がざらつくけれど、ぷっくりとした乳頭は期待で硬くなっていた。

「こんなにいやらしい乳首なのに、昨日は全然触らなかったからね」

セシリオ様は洗濯バサミをカチカチと鳴らす。

焦らされている気がして、お腹の奥が熱くなった。

気が急いで、ぷるん♥と胸をねだるように揺らしてしまう。

以前までセシリオ様は丁寧に胸を愛撫してくれた。濡れることはなくても、舐めたり揉みしだいたり、指先でぐりぐりしたり、可愛がってくれたのだ。

でも今は、その胸を洗濯バサミで挟もうとしている。

「では、いくよ」

セシリオ様は洗濯バサミを開くと、勃起乳首を根元から挟んだ。
ぱちん

「あんっ♡♡♡」

洗濯バサミの噛み合わせ部分が硬くなった乳首をぎゅっ♡と圧迫する。

しかも、洗濯物が滑らないようにギザギザがついているので、そこが乳首に食いこんでいた。

まだ片方しか挟まれていないのに、腰がムズムズする♡

これ、気持ちいい♡♡♡

「おっ♡ ひうん……♡」

洗濯バサミの刺激に夢中になる。

おっぱいって、こんなに感じる器官だったんだ♥

「ほら、もう一つ」

セシリオ様はもうひとつの乳首も洗濯バサミで挟んだ。

ぺちん♥

「おおっ♥ おっ♥」

両方の胸の先端がじんじんと痺れる。

洗濯バサミに挟まれた乳首は無様に潰れていた。

（こんな、みつともない乳首をセシリオ様に見せるなんて♥♥♥）

今、私はとても変な姿をしている。

全裸で、洗濯バサミを乳首につけただけの、とても侯爵夫人と

は思えない姿だ。

ただ、みつともない姿を晒していると思うと興奮しちゃう♥

「セシリオ様あ……♥♥♥」

「なんだ？」

「私の無様な乳首を見てください♥ セシリオ様に見られるほど、

嬉しくなるんです♥♥♥」

「この平らに潰れた乳首を俺に見せつけたいのか。揺らしてみろ」

「はいっ♥」

私は体を上下に振る。すると、洗濯バサミごとおっぱいがたぷん♥と淫らに揺れた。

（なんて恥ずかしい姿なの♥♥♥）

「はあん♥ んっ♥ セシリオ様あ♥」

下品な姿をもっと見せつけたくて、必死でおっぱいを揺らす。

洗濯バサミに挟まれている部分が甘く痺れてたまらない♥

「これだけで気持ちいいのか？」

「はいっ♥ もう、おまんこびちよびちよです♥♥♥」

私は仰向けに寝ると両膝を開いて、じゅんっ♥と濡れた股間をセシリオ様に見せる。涎を垂らすかのように、ひとしずくの蜜が臀部を伝ってシーツに流れ落ちた。

「こんなに濡れているなんて、俺の妻はとんだ変態だね。俺がなにもしなくても、自分で洗濯バサミを挟めばいいんじゃないか？」

「意地悪言わないでください♥ セシリオ様に挟まれるからいいんです♥ それに、セシリオ様に見てもらわないと興奮しません♥」

自分で洗濯バサミを使用しても、ただ痛いだけだと思う。

セシリオ様にいじめられるから意味があるのだ。

「セシリオ様♥ 今日もおまんこ叩いてください♥♥♥」
腰を揺らし、ぷるん♥と洗濯バサミも左右に振れる。

「ああ、分かった」

セシリオ様はまだ掌に残っていた洗濯バサミを置くと、手を振りかぶった。

ぺちいいいいん♥♥♥

「おっ、あゝゝゝ♥♥♥♥♥」

※体験版はここまでです。

続きは有料版でお楽しみください。